

( 続紙 1 )

京都大学	博士 ( 人間・環境学 )	氏名	佐川 宏迪
論文題目	「包摂のロジック」の教育社会学的研究 — 一定時制高校に着目して —		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、高校教育の拡大が終わった1970年代以降の日本を対象とし、生徒層が多様化する定時制高校において、いかにして生徒を「包摂」することが可能になっていったかを検討したものである。先行研究では、各学校で生徒がどのように包摂されてきたかの個別具体的記述は行われていた。しかしながら、全日制高校に進学できなかつたり退学したりした生徒の受け皿に定時制高校がなっていくという大きな文脈の中で包摂を捉えることができていなかった。そこで本研究では特に、教師の実践や学校組織の編成に内在する「包摂のロジック」に焦点を合わせ、各学校で教師たちが実践を展開するにあたって参照しリソースとする、事例横断的でメタ的な枠組みの把握を目標とした。定時制高校において「包摂」を実践する（あるいは「包摂」のメカニズムを作動させる）主体である教師に着目し、教員向け雑誌の言説やインタビューの語りなど種々の資料を手がかりに、「包摂のロジック」の構築およびそれと包摂的实践との結びつきの諸相を解釈することに照準が定められた。</p> <p>第1章では、定時制高校の後期中等教育における位置が戦後日本社会でどのように変遷してきたのかが検討された。具体的には、定時制高校の戦前からの来歴、および定時制高校の発足から勤労青少年教育の機関としてのニーズが低下するまでの過程とその背景について整理がなされ、本論文の定位すべき座標軸が定められた。</p> <p>第2章では、定時制高校が高校教育の「境界域」として立ち上がる前提となった、全日制高校からの生徒の排除を象徴する現象として、1970年代の中退率の増加について検討が行われた。特に、生徒の中退率が高かった工業高校に注目し、教員向けの生徒指導雑誌を分析の資料としながら、退学をポジティブな選択として意味づける教師の言説に焦点が合わせられた。これらを通じて、高校教育からの排除を「教育的」なものとして正当化する論理構成がどのように教師によって行われていたかが明らかにされた。</p> <p>続く第3章から第5章は、主題である定時制高校の「包摂のロジック」に焦点を合わせたものである。</p> <p>第3章は、1960年代後半から1980年代末までの東京都の定時制高校教師の研究会誌を分析対象とした。勤労青少年の教育機関としての役割を縮小させて以降の定時制高校において、教師たちは行うべき教育実践（＝ミッション）をどのように再解釈・再定義してきたのかが、資料の検討から明らかにされた。このプロセスを本章では「包摂のロジック」が変容するプロセスとしてとらえた。資料の分析から、定時制生徒像として従来通りの勤労青少年をイメージできなくなるにつれ、教師らが教育実践のロジックを「学</p>			

習指導のロジック」から「個別支援のロジック」へと転換させ、リカバリーの間や「治療教育」といったコンセプトを打ち出し、より広い範囲の生徒を受け入れうる実践が構想、実践される形でミッションの変化が生じたことが明らかになった。

第4章では、1970年代から1990年代にかけての、東京都の定時制生徒による生活体験発表会の記録誌が俎上にのせられた。本章では、生徒に学校経験のありうる枠組みを提示し定着させるメディアとして生活体験発表記録誌をとらえ、特に中退経験生徒に対して定時制高校がいかなる学校経験の枠組み（意味）を提示し、彼らを動機づけようとしたかが検討された。重要なことは、本誌の語りは教育のエージェントによるスクリーニングを経ながらも、生徒独自の学校経験への意味づけが入り込む余地があったことである。すなわち、本誌において提示される「学校に定着することの意味」は教師と生徒の協働によって構築されていた。この「定着することの意味」を「包摂のロジック」ととらえ、どのようなロジックがいかにして構築されていたのかに焦点が合わせられた。

そして第5章では、大阪府の定時制高校教員OBのインタビューデータの分析に基づく考察がなされた。調査協力者のSさんは、1980年代末から2000年代前半まで「ヤカラ」（柄が悪く見える生徒の俗称）のような生徒が多く在籍する高校で教鞭をとった。彼は勤務校において、生徒が学校から離脱しないよう「非排除的实践」を行っていた。重要なことは、彼が他の教師とは異なる立ち位置にいたマイノリティであったことを強調していた点である。彼は他の教師よりも自身の実践の方が妥当であるというリアリティのもと、独自の「包摂のロジック」を構築していた。これを同一教員集団内でのオルタナティブな「包摂のロジック」の構築実践ととらえ、それがいかにして可能となったのかを解明された。

第3章から第5章までの検討を通じて、高校教育の「境界域」を担う定時制高校において、多様な生徒を「包摂」するためのロジックがどのようにして立ち上がり、変化していったのかが明らかになった。

そして終章では、上記の検討から導出された知見が、教育学研究における包摂論ないし定時制高校研究に対していかなる学術的示唆を与えるのか、またどのような新しい論点を提起するのかがまとめられた。本稿の主要な到達点は以下の4点である。(1) 先行研究で十分になしえていなかった教師の意味世界に内在し、教師のリアリティに根ざしながら「包摂」実践のダイナミズムを記述しえたこと。(2) 教師の包摂実践が生徒のニーズを参照しながら組み立てられ、「包摂のロジック」が生徒との協働構築の所産でもある点を示したこと。(3) 「包摂のロジック」が時間的に変移するものであり、時間の経過という変数を考慮するのが有効である点を示したこと。(4) 包摂の実践が教師間での葛藤を伴うものであり、オルタナティブな「包摂のロジック」が立ち上がる契機が存在する点を示したこと。最後に本稿で残された課題について整理がなされた。

(続紙 2)

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、日本における高校教育の拡大が終わった1970年代以降、全日制高校の受け皿として多様な生徒層への対応を迫られるようになった定時制高校において、いかにして生徒を「包摂」することが可能となっていたかを、文書資料の分析を軸に教師からのインタビューデータの検討を加味して実証的に考察したものである。教育学・教育社会学の領域における本論文の意義は以下の4点にまとめることができる。

第一に、教育学・教育社会学において必ずしも十分な研究がなされてきたとは言えない定時制高校という存在に光をあて、戦後改革による発足から21世紀にまで及ぶ長いタイムスパンでその社会的ミッションの変遷を明らかにした点である。定時制高校の設立当初に期待された役割は勤労青少年教育機関であったが、その機能を果たした時期は意外に短かった。本論文は当初のミッションが後景化する1970年代以降を中心に取り上げ、「治療教育」やリカバリー、個別支援の場といった新たな定時制高校の役割がクローズアップされていく過程を丁寧に明らかにした。こうしたミッションの変化の一方で、定時制高校が高校教育の「境界域」を一貫して担い続けてきたとの指摘も正鵠を射たものである。以上の点で本研究は、教育学・教育社会学研究の重要領域の空白を埋めることに寄与するものである。

第二に、個別の定時制高校の包摂的实践に焦点を合わせるのではなく、広く現場の教師たちが参照し、手がかりとした方針や方向性を「包摂のロジック」という概念で捉えることで、事例横断的なメタ記述の方向性を打ち出し、ある程度それに成功している点である。著者は本論文の中でもたびたび、長いタイムスパンの中に定時制高校の包摂実践を位置づける必要性を強調している。それは、「包摂のロジック」は変化するものだという認識と表裏一体の関係にある。このロジックに注目することで、定時制高校における実践の転換が、一般的に想定されるより早い1980年代初めに始まり長い時間をかけて進行していったことが明らかにされた。これは定時制高校の歴史像に見直しを迫る重要な知見である。また、教師たちが実践を構想する際、中央や地方自治体の教育行政の政策や指針よりも、現場感覚に根ざした独自のリアリティの方を信頼し、有力な手がかりとして参照していたという点もきわめて示唆的である。

第三に、教員向け生徒指導雑誌、定時制高校教師の研究会誌、定時制生徒の生活体験発表記録誌など、これまでほとんど注目されてこなかったテキスト資料を地道に渉猟し、それらを効果的に活用することによって、教師のリアリティやその意味世界に密着したかたちで教育実践のありように迫ることに成功した点である。これまでの教育学・教育社会学研究でも教師やその実践研究は大きなテーマであったが、ともすればエージェントとして教育方法やカリキュラムの機械的な担い手として平板に記述されがちであった。それに対して本論文において著者は、一次資料を効果的に使うことでその心情の揺れや起伏も含め、まさに「主体」として教師を捉えつつその実践の記述を行っていった。この点で本研究は、教育学・教育社会学、なかんずく教師研究や教育実践研究の方法論に重要な一石を投じたものと評価することができる。

第四に、包摂の過程においては「客体」の存在になりがちな生徒の側にも光をあて、「包摂のロジック」が必ずしも教師が単独で構築するものでなく、生徒のニーズがそこに反映されるという形で生徒との協働によって構築される余地が存在することを示した点である。本論文第4章における定時制生徒の生活体験発表記

録誌を手がかりとした分析によって、多くの作文の中で生徒が、学校に定着する（中退しないで学業を継続する）ことに対して、「青春を取りもどす」ことや主流の学校への批判にも通じる「オーセンティックな経験を得るチャンス」といった独自の意味づけを行い、それを発表誌に掲載した教師によってその意味づけが許容されていたことが示された。生徒独自の意味づけが「包摂のロジック」の一部に取りこまれていたという知見は極めてオリジナリティに富むものであり、近年教育学・教育社会学の分野で盛んに議論されている排除されがちな生徒の「包摂」論に対して、重要な貢献を行ったものと考えられる。

他方で本論文はいくつかの問題点を抱えている。第一に、定時制高校は設置主体（公立、私立）や立地場所（大都市圏、地方都市、過疎地域）の違いによって生徒の質や教育課題が微妙に異なることが予想される。しかしながら本論文で扱われているデータは、もっぱら東京、大阪など大都市圏の公立定時制高校のものであり、必ずしも多様性を反映していないきらいがある。第二に、内的意味世界に照準したアプローチをとったことの必然的結果として、「包摂のロジック」構築に与えた外部の客観的条件の把握が弱くなってしまっている。本論で取り上げた事象を、外部の客観的条件との因果関係という視点で捉えれば、また別様の解釈が可能であっただろう。本論文にはこのような不十分さが存在しているが、もちろんこれらは今後の研究のための課題として残されたものであり、これによって本論文の価値が損なわれるものではない。またこれらの問題点について著者は十分に自覚的であり、今後克服していく意思をもっていることも付言しておきたい。

よって、本論文は共生人間学専攻人間社会論講座人間形成論分野の理念に適った論文であり、博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和3年1月27日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 令和 年 月 日以降